

第4回 魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会

日 時：平成19年1月26日(金)

13:30～16:00

場 所：サンラポーむらくも 2F 瑞雲の間

会長挨拶

井上会長

新しい年を迎えまして、これが初めての検討委員会でございます。本年もどうぞよろしく
お願い申し上げます。

今回が第4回目の検討委員会になりますが、前回は高校の再編成と、高校にとっての魅力
と活力の関係についてさまざまな意見を交換いたしました。生徒数が減少していくという時
代にありまして、どのようにして魅力と活力ある高校をつくっていくのかということが、
我々に与えられた課題であろうと思われます。今年は答申の取りまとめに向けての議論もい
よいよ佳境に入るわけでございますが、本日もぜひ活発な御議論をお願い申し上げます。

出席者確認

事務局

本日の出席者は、会議資料の出席者名簿と席次表をご覧ください。

大多和委員、中川委員、藤原委員、宮脇委員、吉迫委員が所用のため欠席。15名出席。

議 事

議長

それでは、会議次第に沿って議事に入ります。

議題(1)について、最初に、前回の会議の整理をしておきたいと思ひます。

事務局から説明をお願いします。

事務局

資料1「第3回魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会での主な意見」及び

資料2「単位制高校 東部独立校・西部拠点校の設置について」により説明。

議長

今、事務局から資料1の方では、高校の再編成と魅力と活力づくりについて、今後どのよ
うな進め方をしていくかということですが、 の生徒数の少ない離島云々ということにつ
いては、本日を含めて第8回までの検討委員会で議論を深めていくと。そして の地域の教育
環境、産業等を生かした魅力と活力ある高校については、第6回から第8回で議論を深め、
また並行して のこれまでの再編成の検証と今後の方向についても、特に総合学科、中高一
貫教育等については、これも第6回、第8回の検討委員会で議論を深めていきたいというこ
とです。その他のところでは、前回の御質問に係る幾つかの具体的なお話と、今後の作業、
財政負担を含むシミュレーションや財政負担についての検討課題を、順次第5回以降に御説
明いただけるということでした。

それでは、議題（２）の県立高校の配置について、事務局から説明をお願いします。

事務局

資料3「県立高校の配置について」、資料4「島根県公立高等学校（全日制）配置図」、
資料5「公立高等学校（全日制）入学者数の推移」について説明。

議長

それでは、これから資料3の2、主な検討課題について、離島や中山間地域の高校のあり方、また、一方では、都市部の高校のあり方、この配置、魅力づくりについて、この2点を中心に御議論をお願いします。

委員

専門高校とか、あるいは総合学科を有する学校というのは、非常に特色を出しやすいんですね。ですから、その中で地域に根差したとか、あるいは島根県のニーズにあうものをいろいろ取り入れていくという発想は非常にしやすいのではないかと思います。非常に困るのは普通科を有する高等学校で、ここに活力と魅力というのは一体何なのかということ。恐らく県民にアンケートでもとれば、進学率だとかいうことになってしまうと思います。普通高校の魅力とか活力とは一体何だろうかというところをもっと議論していかないと、単に進学率がいい、難関大学へ何人入学させたという話でこの魅力と活力の話をしていくわけにはいかないのではないかと思います。

議長

普通科高校という性格上、一体どのようなところで個性や特色を出せるだろうかと、これは皆さんの御意見をぜひ伺いたいという趣旨であったと思いますが、いかがでしょう。

委員

今、発言があったように、普通科は本当に特色がないのです。中学生に対する高校説明会というのがありますが、ある高校の説明会で「うちの高校は特色のない普通の高校です」という説明をされた途端に、ある生徒が「そんな夢のない高校なんか行きたくない」と言ったそうです。進学率が極めて高かったり、国公立への入学率が高ければそれが特色になると、それとあとはスポーツぐらいしかないと。はっきり言って専門高校は特色は出しやすいが、普通高校は本当に特色が出にくいというのが現実です。ですから、生徒募集をしても、なかなかそこが理解してもらえないのではないかと思います。

委員

今、普通高校は非常に特色を出にくいというお話がありましたが、私もそう思います。私の居住している地域の高等学校は普通科と農業科の併設校ですが、専門科は非常に生き生きとしています。ところが普通科になるとどうかということ、なかなか特色が持てない。

そういう中で、地元の高校には農業科に、サツマイモを朝昼晩食べないと生きていけないというほど芋が好きな先生がいらっしゃいます。その先生を中心として、地域ぐるみの活動が、実は特色を出にくい普通科へも非常によい影響を及ぼしています。その先生の講義は聞いてみたいということで、普通科の生徒も普段の授業では受けられないから、地域で講義なさるときに聞きに行こうということで、併設校ならではの相関関係で非常にいい影響を出しているのではないかと思います。普通高校では非常にやりにくいことだと思いますが、併設校ならではの良さがあります。規模は小さいが、では何が魅力なのかということ、これ

は生徒自身が感じる魅力もあるでしょうし、地域が注目をしてきているということに対する生徒の誇り、自分たちの高校が、ある程度、地域の人たちに分かってもらえるという、そういう誇りも含めて、それは必ずしも生徒一人一人の魅力ではないかもしれないが、地域の人たちも含めて学校の魅力ということではないかなと思います。そしてそういう地域から応援されているという、それが子供たちの活力を生み出す源になっているのではないかということ、この2、3年、非常に強く感じております。農業科の生徒も非常に意欲的に動きませんが、それに引っぱられて普通科の生徒たちもいろんな活動を始めているという、そういう中から何かヒントがないかなと思っています。

議長

併設高校であるということで、農業科の特色が学校全体のカラーへ影響を及ぼしている。その前提になるとおっしゃったのは、恐らく地域の何らかの個性とか魅力というものがそれぞれにあり、自分たちでその存在を発見して、恐らく普通科の方であろうとも、そういうものを活かしていく、あるいはそれによって普通科の方でもアイデンティティーを見つけていくようなことが可能かなというのが、今のお話かと思います。

委員

先ほどまでの御意見と少し外れますが、私どもの立場から学校に対する魅力といたしますと、親としてはあの学校へ行かせたいな、子供からすればあの学校へ行きたいなというのが魅力に通じるだろうと。ではどういう場合にそういう気持ちが起こってくるかといいますと、先ほど農業、いわゆる専門高校に関するお話がありましたが、それに似通った目標なり目的なりを普通高校でも持たせる必要があるのではないのでしょうか。それは先生方が子供たちに対して、いろいろ目標なり目的なりを持たず教育をし、その目的に対してどういう教育をするんだよという内容と、家庭における子供に対する教育の内容を一致させることだと思えます。学校で先生が生徒に言ってることと、家庭で親が子供に言ってることが違ってるようでは一致していない。専門高校の場合ですと、水産であろうと、農業であろうと、そういう一つの大きなテーマが一致しているので、学校においても家庭においても意見が自動的に一致するであろう、それを普通高校でも一致させるような中身を持たせる必要があるのではなからうかと思えます。

これは先ほどから言われている、いろいろな、農業にしる水産にしる、それに合わせて子供に教えている内容を、それと同じようなレベルで家庭に持ち込んでやるということが魅力に通じるのではなからうかと思っています。

委員

私の本業といたしますか、男女共同参画を進めるということもそうですが、どのくらい意識が変わったかというのは色が変わるわけでもないし、特に意識啓発の場合は数字が出るわけでもないですが、こういう教育の現場というのはそれと同じで、やはりどれだけ成果が上がったかが分かりにくいということで、進学率という数字で計られやすいということも十分承知しておりますが、先ほどの御発言にもあったように、要は自分の住んでいる地域を知らずして、学力や知力のみ身につけてどうなるのかというのが私の持論であります。

私が今、約半世紀ばかり生きておりますが、高校時代にはなかなか関心を持てるような授業を受ける機会がなくて、なかなか頭の中には知識も学力も入ってきませんでした。この年になって、やっといろいろ関心を持たせてもらえるような人との出会いがあり、非常に吸収率がアップしています。やはり地域の文化を伝えることができるような講師をどんどん投

入るとか、とにかく関心が持てて初めて身につけられるのではないかなと。時間数ばかりたくさんあって、果たしてそれが本当に自分の体の中に、頭の中に残るかということ、自分を振り返っても非常に疑問に思っています。

実は大田市はこの7月には石見銀山遺跡の世界遺産登録がほぼ間違いないということですが、大田市にある2校の子供たちが、どれだけ自分の言葉で石見銀山遺跡のことを語れるのか、私たち大人ですらなかなかできないですが、まずは自分たちの地域を自分の言葉で語る子供たちが社会に出ていけるように、何が普通かという議論はあると思いますが、普通ということなら、人として一人前の社会人になる前段階の高校生が、ぜひそういうものを身につけられるような高校になっていけばよいのではないかなと思っています。

委員

これからの会議の焦点が、都市部と、あるいは中山間、離島の場合をどういう形にしていくのかという問題と、今の魅力の問題ですが、私はこれはなかなか難しいと思っています。魅力というのは子供にとって魅力の学校なのか、あるいはそれを入れさせる保護者あるいは地域にとって魅力のある学校なのか、そこら辺が一つあるだろうと思います。

かつての状況を見ますと、一見こういうところで案をつくると、どこも総合学科などを入れた方がいいということになり、あれも選択できる、これも選択できるというような、例えば総合学科のある学校をずっと見詰めてみますと、机上では、入学しているんな人生が歩めると、いろんなことが学べるということですが、現実見ていると、やはりあの年代の子供は魅力というよりも苦勞することを望まない。これは大変嫌なことが多いから、勉強を余計にしなければならないからこっちを選択するとかいうことで、結果的にいろんな選択ができることを魅力と感ずるのか、しかしあの年代には幾ら嫌でもきちんとならなければならないという部分を加えることが魅力なのかというような視点もありまして、私は普通科というものを、先ほどから話が出ているように無理にいろんなことに変形する必要はない。その地域、地域で普通科の中で特色を出して子供を育てていったらいいんじゃないかなというふうに思って、先ほどから魅力ということの定義について、いろいろ考えてるところでもあります。

議長

選択の幅といいますか、いろいろプラスしていったメニューをたくさんつくるということが必ずしも生徒にとっての魅力かどうかということを考えて、一体魅力とは何だろうということをもう一回問い返してみる必要があるかと思われま。

さらに御意見を出していただきたい。最終的には私の方から問題を提起したことにだんだん焦点を絞っていきたいと思います。

委員

私、実は普通科高校しか経験がありませんが、都市部の大規模高校2校と中山間地域の高校の経験があります。それから中規模校の経験があり、普通科の置かれているいろいろな状況を体験しましたが、どの学校であってもこれだけはやらなければいけないということ、これはやはり変わらないものがあると思います。ただし、その学校が置かれている地域によって、いろんな状況がありますので、それとどのようにかみ合わせていくかによって、その学校のそれぞれの顔や色合いが出てくるんだろうということを経験しました。

中山間地域の小規模校には5年間おりましたが、そこでもいわゆる狭い意味での学力ですが、これは松江で行ったことと一切妥協はしませんでした。ただしいろんな状況がありますので、それを今度は小学校、中学校と一緒にやっていく、小学校の授業も見せていた

だきますが、高校へも来て見て下さいということなども実施しました。そういういろんなやり方で、その地域とのかかわり、地域の方に理解していただくということ。また、中規模校では、それこそ大規模の普通高校の間に挟まれた、そういうところでどうやって生徒たちに力をつけ、そして生徒や保護者に魅力を感じてもらえるようにするかということ、特にそこでは教頭という管理職の立場でもあったので、いかにやっていくかということ。そこにはいろんな地域独特の文化があります。そういうものをどうやって教科の授業等に取り組みながら地域の方に学校へお越しただいて、学校を理解していただくとか、いろんな工夫の仕方があったように思います。

ですから、これが全てではありませんが、やらなければいけないところは、これはどこの学校であってもあるわけで、その上にどんな色合いを、その地域の状況と合わせてやっていくかということではないかと、経験から思っております。

委員

私は、先ほどの御意見と同じ意見ですが、普通高校でも学ばせないといけないものは絶対あるし、進学率とかもあるかもしれませんが、何か目標を持たせてやれたらいいなと思います。

それと、先ほど資料2で説明があった、通信とか定時制の教育の特色のところにもたくさん魅力があるなと思います。だから、そういうものも取り入れて、結局、農業とか工業とか、そういう科目を勉強されるのは、自分で体を使って、いろんなところへ出かけていったり、地域の人たちと触れ合いながら学ぶという機会が多いと思います。普通高校の場合も、学校の中だけではなく、地域に出かけていって何か学ぶような機会をつくるとか、何かそういう企画もあったりすればよいと思います。目標を持たせるといっても、自分のことを考えても、高校のときに本当に将来の進路を決めるのはなかなか難しく迷っているときだと思えますが、それを目標を決められるように、確かに国語とか数学とか英語とかはいい点をとるのも大切だと思いますが、人間として成長できるような何か方法というか、そういうことを考えていけばよいのではないかと思います。

委員

隠岐にいる場合、学校を選ぶというと、隠岐高校か隠岐水産高校かということになります。今、私は福祉の現場で仕事をしていますが、水産高校でしっかり鍛えられ、仲間を大事にするとか、そういうことをしっかり学んでから、福祉の専門学校を出てうちに来た子供たちはまじめで、みんなのことを考えて、力を合わせてしっかりやっています。そういうお話を学校の先生にもさせていただきます。水産高校の子供たちには誇りを持ってほしいと思っています。

私自身は、松江の高校を選びましたが、教育の主人公は常に子供だと思うので、子供にとって魅力というか、自分が選んだ学校ということがあると思います。それと青春の本当に3年間ですので、もちろん当たり前前に勉強はしなきゃいけないんですが、その中で、やっぱり一番、子供たちが思うのは友達とか仲間じゃないかなと思いますので、高校の名前そのものよりも、高校で自分たちがつくってきたいろいろな物語というか、そこら辺が本当の魅力じゃないかなというふうに私は思います。

委員

私は非常に今日は辛辣なことを言いますが、もうそろそろこの会も、いわゆる中山間地あたりの生徒が減少する学校についてどうするのか。そこが一つ、この方針が決まると、あの

地域は別だけこの地域はということにはならないのではないかと。それで次か、その次の会で、例えば都市部の4クラスの普通高校があると、その周辺の地域に2クラス、2クラスの高校があると、そういうときに3校とも今後活かして魅力を出すような方向へ持っていくのか、あるいは4、2、2で8クラスだと、将来減っても、それは6クラスにまとめて一つの学校した方がもっと魅力が出るのか、その辺のメリット、デメリットを挙げて、少し議論してみる必要があるのではないかなと。3つを残せばそれぞれの地域が活性化するのではないかと、だから残すべきなんだという考え方もあるでしょうし、そういう厳しいことを言っているのかどうか分かりませんが、いつかはその辺に触れないとこの会は終わらないのではないかなという感想を持っています。

委員

資料5について、この資料で各高校の5年間の定員の充足率が記載されていますが、これを拝見しますとさまざまなことが読み取れると思います。地理的なことも影響してるのかなという、安来とか飯南とか津和野とか、県境に近いところの状況ですね、あるいは専門高校であっても非常に頑張っておられるところとそうでないところ、普通科でも増えているところもあれば、減っているところもあります。やはり子供の立場あるいは保護者の立場になってみますと、その高校に行くのが、そこへ行って何が学べるのかという中身と、卒業した後どうなのか、進学しようと思えば進学がどうなのか、就職しようと思えば就職率がどうなのかという、その中身と出口ではないかなと思います。

そういう点で、この表から読み取れる、頑張っているところの中身ですね、普通科であってもそこにプラスアルファがある、その地域の魅力ですね。先ほど芋というお話がありましたが、本当に島根県はいろんな文化がありますので、その文化を少しでも取り入れた魅力ある郷土の講座といいますか、今、島根県はふるさと教育ということを非常に力を入れておられますので、そのことも含めると総合的な学習の時間だとかいろんな時間をうまく活用していただいて、そういう地域に密着した、あるいは地域の特色を活かした、地域の人材を活用した、そういう魅力のある講座をつくっていただき、それを特色にさせていただくのも一つではないかなということも思いました。

それから、この表に上がってありませんが、高専も非常に厳しい時期を乗り越えて、今いろんなことに取り組んでいるということが新聞等でよく報道されておりますので、やはり専門高校は専門高校なりの魅力、普通科の高校は普通科で魅力が出しにくいかもしれませんが、その中で頑張ってくださいという、その努力の跡が何か示せる、そういうことも必要ではないかなということを感じました。そのことが、また出口にも当然つながって、入り口、出口両方につながっていくように思いました。

議長

総括的な角度から御意見いただきましたし、一つの重要なポイント、鋭い問題提起もいただいたわけですが、一回りしたわけですが、今日の議論を通していかがでしょうか。

委員

いろんな御意見がありました。すぐその意見をもとにやってみようかなという話には、やはりなっていないですね。

それはなぜかという、やはり保護者や生徒が期待するものは大学進学なんですよ。これは調べていただければすぐ分かりますが、かつてのような勢いが今島根県の高校教育の中から失われつつあります。高校の教員、特に校長を中心として、どのようにして島根を復活さ

せるかということをおっしゃっていますが、なかなかできません。なぜならば今中学生がほとんど勉強しない中学生になっております。中学2年生を見ると、全国の半分ぐらいしか勉強時間がないですね。だから、今これは根は物すごく深いところにあります。

我々もがき苦しんでおりますが、子供たちの魅力ある学校というのは一体何なのかなというものをきちんと掘り下げてみないと、非常に表面的な会話で終わってしまうのではないかと、前回、10年前検討したときには、例えば中学生が今、本当に普通高校へ行きたかったですか、専門高校へ行きたかったですか、そういう調査をして、それをベースにしているんな話しをしたんですね。専門高校、魅力あると思えますが、本当に今、子供たちはそこに行きたくて行ってるんでしょうか。こういう言い方は非常に差し障りがあるかもしれませんが、そういうことを検証しながら、そして、総合学科が本当に機能しているのかどうか。ただはっきり言えるのは、松江農林とか出雲農林へ例えば動物科学科とかは人気があるんですね。かつては定員割れをしていた学校が今、定員をかなりオーバーしているとか。そういう子供の動向とか志望とかといったようなものが、何か具体的に見えてこない、何か観念的に話しをしていてもなかなか難しいのではないかなという感じを受けます。

何か、もう少し資料が欲しいなという感じがします。この数字だけ見ていて何を話すのかなという感じがしてくるわけでして、何か、そういう方向性が出てこないかなということ直観的に思いました。

委員

本当はいろいろな考え方があると思いますが、一番最初の資料1の3番に、再編成の検証とか、その辺が後回しになっていますが、これまでの再編成とか総合学科の結果がどうだったのかという検証を先にしてから、次の議論をしていった方が本当はいいのではないかなという気がしています。

それと、先ほどから話が出ていますが、目的が本当にある子というのは、高専や専門高校に行きたいという子がいます。また普通高校はまだ目的があまり決まっていな子がかなり行ってると思いますが、その中でも、結局、先生ですね。語弊があるかもしれないですが、普通高校に行こうが専門高校に行こうが、そこに入って、生徒が自分は将来何をやるのかなと思うとき、生徒とのいろんなコミュニケーションをとりながら、生徒がどういう目的意識を持っていて、それだったら絶対大学に進学した方がいいぞとかアドバイスしてくれる先生がいると、生徒もその気になって頑張ると思います。中学校でもそうですが、高校でも生徒が非常に先生の顔色とか、先生が本気で自分たちのことを思ってやってくれてるのかなというところをよく見ているような感じがします。目的意識のある子はそうですが、そうでない子でも先生の話題というのは高校生同士の会話の中に非常に多いです。先生方がいろんな問題を抱えながらも、生徒の個性もありますし、やっぱり一人一人の生徒が言うことに対して、常に真剣に取り組んでいるというイメージのある学校は、そういう状況が生徒の口から保護者にも伝わりますし、また地域へ出ていろいろな活動をされている先生もいらっしゃると思います。そうすると何かあそこの学校に行ったらおもしろいみたいだよという話が伝わって、同じ普通科の学校でもやはりちょっと見方が変わってくるんじゃないかなという気がしております。

あともう1点は、高専と比べると、普通高校はすごく規制が多いんです。同じ年代ですが、例えばバイクの免許にしても、法的には取れるのに、今、普通高校では、内規みたいなものがあり規制されているんですね。そのあたりは高専では、たとえばバイクで事故したとして

も、それは自分の責任だよと、保護者もそうだと思いますから、私らから見て普通の高校に通っている生徒は、何て窮屈な学校生活を送っているんだろうというふうに思ったのが1点です。そのあたりはもう生徒の責任、親の責任で、学校側がそこまでの規制をしてまで、いろいろと子供を守るといふようなところまで手を出さなくてもいいのではないかなという気もしています。

事務局

事務局の方から各委員の皆様方に、お伺いします。

魅力と活力あるというのは、先ほどからの議論を伺っておりまして、非常に難しいテーマでございます。過去のいずれの会においても、魅力と活力とは何ぞやということが、主要な議論になっているというように思っております。

少し角度を変えてみて、先ほど普通高校についていろいろとお話がありましたが、皆様方のお立場で、またこれまで御自身が教育を受けてこられた経験をもとに、公立、県立の普通高校について何を求められるのか、何を要望されるのかということを中心に簡単に教えていただきたいと思っております。

実は私、こういう場でなくても、学校以外の関係者とお話をする機会があれば、学校に何を求められますかということをお伺いしておりますが、ちょっと私どもが今後この検討委員会を進めていく上で、皆様方が普通高校に対して何を要望されておられるのかということをお伺いしたいと思っております。

議長

事務局の方から、学校に何を求めるのか、ということについて質問がありましたので御意見を申し上げます。

委員

なかなか一言で答えるには難しい宿題をいただきましたが、私は2点あると考えています。

第1点は、県立高校というのは県の税金で賄っているわけですから、当然それを県民に還元しなければならないという、これは何の事業でも同じで、教育もしっかりだと私は思っております。そういう意味では、やはり地域でいろんなジャンルはあると思いますが、地域が望む人材を育てていくということが、県立高校によらず県立学校の任務では、大学も含めてそうだというように思っております。だから、少なくとも医者の部分で言えることですが、島根大学を出て、広島に就職するというのはもってのほかだと私はいつも思っております。県立の学校というのは、県民が望んでいる人材を育成をしていくのが、これが第一義だと思っております。

それから、第2点は、これは私どもの住んでる地域について言えることですが、当時は農業高校として出発をしておりました、要するに農業後継者を育てていこうという発想だと思っておりますが、それに読み、書き、そろばんを添えていこうという、そういう発想で、当時それぞれの村の人たちが木を1本ずつ持ち寄って、そして労力奉仕をしながら建てたのが現在の高校の前身です。そういう意味において、地域は地域としての後継者へのいろんな思い、それを凝縮したのが私は地域の拠点である学校ということではないかと思っております。

そういう意味において、やはり地域を抜きにして学校の議論はできないのではないだろうかという、その2点は県立高校に望みたい。たくさんあるでしょうが、差し向き私は、カリキュラムにのっとった教育はもちろんのことですが、必ずその中に地域という視点を盛り込んだ、そういう教育活動を展開をしていただきたい。

委員

実はこの前の県教委のここ10年間の計画をつくったとき、私も関わらせていただき、そのときに普通高校のビジョンが何もないと。専門高校はあれこれ書くことがいっぱいありますが、普通高校のビジョンは何かという上司からの質問に、はたと困ったわけです。そのときに感じたのは、やはり一番目には高等教育に対する学力を身につけることが普通高校の使命ではないかと。普通高校というものは、やはり大学進学ということが当然あるわけですから、将来その子がいろんな分野に行って、いわゆる高度な能力を身につけるための基本的な学力をきちっとつけることが、大きなビジョンだということを当時、言ったことがあります。それと同時に普通高校のビジョンというものは、先ほどあった、地域の特色を活かしたり、部活動で心身を鍛えたり、たくさん読書をしたりしながら、一方その学力と同時に人間的に心身ともに鍛えるというのが大きなビジョンではないかと、この2つが柱だと思ってきました。

委員

私のところは看護学院です。県内の高校を卒業して、ほんの一部の学生が入ってきますが、私も今までずっと見てきましたが、高校の先生は進学させようと思って一生懸命に指導しておられると思います。進学のための勉強は確かにしてると思います。だけど、何か入ってきた途端に勉強をしないのです。全部が全部じゃないですが、何か進学のための勉強というか、入るための勉強というか、本当にきちんと教えられています、あいさつにしろ何にしろ、入ってきた途端にしなかったりとか.....。

高校とか大学を卒業した学生も最近多いですが、本当に地道に努力をするというか、先ほど言われました、将来、大学とか、働くときにも役に立つように努力するところがない。全部の学生ではないですが、そういう学生が最近何か増えてきたように思います。

やればできると思います。だけど本当に目先のことだけ考えて、学校に入ったらもうそれでいいという感じで、特に推薦入学の人は合格が決まったら、その後勉強しなくなるようです。だから、そうして推薦で合格した人も卒業するまできちんと勉強してくださいと、勉強するくせがついてないというか、そういうところはちょっと感じるがあります。全国的に他の看護学校でも推薦で合格した生徒は勉強しないので、課題を与えて、入学するまでずっと続けて勉強してくださいというふうにやってる学校がたくさんあるようですが、うちはまだやっていません。

委員

先ほどと同じようなことになると思いますが、高校教育でどうあってほしいかという質問があったので、私は教育者でも何でもなくて、一社会人ですが、私の立場から言いますと、過去の経験から言いますと、高校では、生徒にまず目的を持たせてほしいと。その目的に対して目標を持って、その目標をどうやってこなしていくかということをお教えしていただきたい。例えば将来何になるんだという目的を持たせる、そしてその目的を持ったならここまでの勉強を達成しなければいけないよという目標の達成をさせていく。こういうことを学校で教えて、それと同じことを家庭でもできるような方法をとっていただきたい、そういう教育を高校ではやっていただきたいと。そうして今度は社会人になったときに、そういう習慣を持って会社なりなんなりに勤めて、会社でも目的を持ち、目標を持って日常生活を送るという習慣を身につけておいてほしい。そういう願いを持っておりますので、参考にさせていただきたいと思います。

〔休 憩〕

議長

それでは再開します。

本題の方に戻りまして、離島や中山間地域の高校のあり方をどう考えるのか、都市部の高校のあり方についてはどのように考えていけばいいのかというあたりについて、御意見を集中していただきたいと思います。

委員

若干、議論が戻るかもしれませんが、魅力と活力をという点で一つ付け加えさせていただきます。

キーワードとしては連携ということで、今子供たちの学力低下とか、そういう点で、小・中連携とか中・高連携とか、私どものところは幼稚園、小学校、中学校がありますので、幼・小・中連携ということは今目指しておりますし、それから県立大学の方は、同じ県立ということで高・大連携という、そういう取り組みを行っておられると聞いております。そういう点で、いろんな地域でそういう連携をキーワードにして、小・中・高とか、中・高の一貫校とか、幼・小・中・高一貫校とか、そういう新しいタイプの高校、都会ではそういうものがありますが、島根は私学が少ないですので、なかなか一貫校ということができないという点で、県立、それから私ども国立大学法人は、そういう組織とか枠を超えた連携ということを、やはりお考えいただくのも一つの魅力、活力を生み出すことではないかなということをご提案したいと思っております。

委員

私の住んでいる町では今年度限りで4校の中学校が統合されます。生徒数減で1校になって、250名程度の学校に生まれ変わりますが、私はもう前から、小規模の学校では勉強はできるけど、ほかの社会的な生活とか、そういうものは育たないというように考えておりました。

結局、親として子供に何を求めたいかといいますと、今これだけ厳しい世界で競争に勝てる子供、極端に言えば、人を払い落としてでもはい上がるような子供に私は自分の子供を育てたかったわけです。余りにも仲良し過ぎて、先生とも仲良し過ぎて、自分が何を求めているのかがはっきりつかめない、そういう子供には育てたくなかったという点があります。ですから、勉強しろということは一言も言ったことがありません。自分が勉強して偉くなりたかったら自分の人生なんだから自分のために頑張れと。4人おりますが、2人は勉強をしています、2人は勉強しません。ですから、勉強しない子はそれなりの人生を送るだろうと思っておりますし、勉強していい学校に入っていいところへ就職すれば、それだけ自分の人生が豊かになるだろうという言い方をずっとして来ております。

そういう中で、やはりある程度の規模、それがなくなった学校は、私はもうある程度の規模の学校に統合すべきだと思っております。極端な言い方をすれば、近いところに小規模の学校が2校あれば、これはもう一つになった方がいいのではないかと、校舎は別々でもいいのですが、1つの高校でよいのではないかとこの考えを持っております。生徒数の減少ということが、本当に間違いなくやってきておりますので、なるべく早い時期に高校再編を進めていただきたいと思っております。ただ中には、少人数でいい教育ができるから小規模でもいいから残してほしいという方もたくさんおられることは承知しております。

それともう1点、県立高校の魅力を出すために、もう少し普通高校の独自性が発揮できる

ようにしていただきたいと。要は校長以下、先生方にもっと裁量権を増やしてほしいと、そうすれば自由な発想で、もっと独自の高校をつくっていけないのではないかと。校長先生や教頭先生、長くて3年ぐらいで替わられますので、継続的にはなかなか難しいと思いますが、もっと独自の高校がつくっていけないのではないかと私は考えます。

委員

今の御意見、統合して、大人数の方が切磋琢磨されてよいということでしたが、私はそれとは全く正反対の考え方です。ただ後段の部分ですね、校長先生とか教頭先生にもっと裁量を持っていただいているというのは、本当に私自身もいつも高校だけに限らず、中学校、小学校に対しても、いろいろな思いの中でもっと裁量権があってよいのではないかなと思っています。

自分の体験からですが、私の地元は中山間地で、小学校のときから複式です。その当時、小学校1年のとき全校が約100人ぐらいだったのですが、1年、2年のときから複式で、4年生から上は一学年20人近くおりましたので単式でした。私が小学校を卒業したのが昭和46年ですが、そのときに32人だったのが、今20人ぐらいになっています。この30何年間の間に、40人台から20人台になったりしながら、それでもまだ何とか今その規模で維持させていただいています。要は私も含めてもう30年間その小規模の小学校で育った卒業生が、中学校に行ってもせいぜい2クラスで、その上の学校に進学しても、規模は大きくても1つの専門分野ですので、クラスの人数は40人です。その中で、5年間やってきて、極端に言うと、大規模校の中で切磋琢磨というような経験を全くせずに社会に出た人間、私の周りにもそういう人がたくさんいますが、そういう人達が必ずしも劣っているとか、大多数の中に入ったときに意見も言えないとかいうことはないと思います。よく一般的な議論の中では言われますが、どうも子供が少ないとみんな多いところへ入ったときに困るからと。だけど決して私たちの小学校の子供たちがほかの多い人数の小学校の子たちと一緒に研修に行ったとしても、かえってリーダーシップをとったりとか、中学校に進学してもみんな生徒会の役員やったりとか、小規模校でもやはりそういうこともありますので、私は少人数教育は勉強もできるようになるし、逆にある意味ではリーダーシップをとれる、嫌でもだれかに任せるんじゃないで、自分自身が動かない限り絶対何事も進まないわけですよ。だれかがやってくれるということがありませんから。そういう意味では少人数教育もいいと思いますし、これからの高校のクラス数の問題であるとか、定員の問題であるとか、1学級あたりの定員の問題であるとか、その辺も含めたときには、必ずしも大規模校でなくてはだめだということはないと思います。

ただし指導者の関係で、今の法律によって、どれだけの生徒数だと教員は何人しか配置できないということがありますので、実際の教育の現場としてはそのあたりは問題があるかと思いますが、その辺は日本全国そういう状態になっていくと思いますので、国の施策を変えていただくことも考えながら、島根から逆に発信をして、そういう先進地として頑張っていけるような中山間の方向性を出していけたらよいのではないかと考えております。

委員

私は適正な規模というものは必要であると考えます。理由は2つです。

1つは子供の学力向上。これは島根県にとっては必須の条件であると思います。もう一つは、心理学的な発達理論の観点から、少子化に伴い同級生が減ってくると、そうなる異年齢、違う学年との生徒同士の関わりが部活動ですとか生徒会活動などを通じて重要になって

くるということで、やはり高1から高3までの重要な時期に、たくさんの自分とは違う価値観の生徒に触れるということが重要であると思うからです。

委員

今、いろいろな観点の意見が出てきました。実は10年前にも適正規模とは何だということが当時の検討委員会で議論され、4学級以上8学級以内が適正規模ということで、県教育委員会が計画の中に出しています。当時は大規模の学校は10学級ありましたが、今大体8学級規模になったわけです。現在高校は分校入れて39校ありますが、適正規模の4学級をもう下回っているのが分校も含めて10幾つあるわけですね。そして今、中山間地の中規模校が実は4学級ぎりぎりです。これは適正規模じゃないということになってくるんですよ。では適正規模じゃないから、それじゃあ統合するのcaというような話は、これはちょっと暴論になってくるだろうと思いますが、本当に4学級以上という適正規模を維持していかなくちゃならないのかどうか。

一方では、高等学校が地域文化の拠点であるということで、1学級の本校が残っています。こういう形がどんどん続いていったとき鳥根県は大丈夫なのか。逆に、その適正規模ということを書いておりながら、なかなか統合というのは非常に難しい問題で、その辺の考え方なり示唆というものを我々は出していかないといけないかなと思っていますが、高校を預かる現場の教員としては、とてもそんなこと言えませんので、皆様方にお知恵を借りるしかないかなと思っていますところ。ただ、前は、いろんなことを考えていろいろ始めましたが、例えば総合学科にしても、本当にそれがどうかという検証を少しお聞かせいただかないと、なかなか皆さん話が先へ進んでいかないのではないかなという感じがしています。

委員

先に、高校に対して何を求めているかということについて、少し最初にお話をしたいと思っています。私は物づくりに携わっている者としてここに来ておりますが、高校に対しては、やはり地域が求める人材を育成してほしいということが一つ。それから次のステップ、目標なりを達成するために学力なり人格を身につけるところだというふうに思っています。その中で、やはりもう少し子供たちは苦勞をしてほしいなというふうに感じます。学力に対してもそうですが、先生に対して、地域に対して、もっとつらい思いをこの時期にしっかりしてほしいなということを感じます。

それから最初の方で意見が出てましたが、地域と学校と家庭とのかかわりというものはとっても大事だと思います。私自身が女であり母親ですから、特にそう思いますが、お母さんが子育てに関わるということはとっても大事なことで、子育てができる、子供が将来こういう大人になってほしいという段階を支えられるという立場であるお母さんの役割というのは、とっても大事だと思いますし、それに関わって今はとってもよかったなと思います。

以上のことが、高校に対し求めているという意見ですが、後段のことについては、子供の数が減少しているという現実を考えれば、統合するとか、それから総合学科ができるというようなことに対しては異論があるわけではないですが、実際に私、浜田の奥の分校のすぐ近くに住まいをしておりますが、生徒たちがとっても地域のおばあちゃんたちとたくさん関わりを持っており、老人ホームへ行ったり、保育所へ行ったり、地域との関わりという点では、高校生の元気な力を地域がいただいております。しかし、残念ながら地元のためにできた分校でしたが、遠くの方、浜田市内あたりから進学してくる生徒がとっても多くなったなということを感じて、何のための分校だったかなということが最近では言われるようになってお

ります。

一概に子供が少なくなったから統合ということもどうかと思うし、逆にこれはもう現実問題として受けとめなければいけない問題でもあるし、私自身がまだ方向性がきちんと理解できない状態です。江津あたりの工業高校では、質を高めるということで、地域に企業を持ち込むような高校づくりをしていこうというOBの方たちの努力が今、一生懸命進められています。そういう意味でも魅力のある高校というのは、子供たちだけではなく、地域のOBの方なんかの力を借りるということも、高校の質を高める魅力かなという気もしております。

委員

今の中山間地域の関係のことですが、意見というより県教委の方に質問したいのですが、今、島根中央高校は今年から募集をされていますが、この資料5を見る限りでは、川本、邑智それぞれ2クラスずつあって、平成18年でも非常に大きく定員割れをしているような状態で、新しく島根中央高校を創られて、先ほどあった適正規模の最低の4クラスという形になっています。これも一つの中山間の高校の統合ですから、あり方として、4クラスで新しく新設されて、これが果たして定員がいっぱいになるものかどうか、4クラスにされたのは、先ほどの縛りがあって4クラスにされたのか、どこかから生徒をそれだけ集めてこようという意図があるのか、そのあたりのところを率直に聞かせていただきたい。

事務局

まず、今年度集まるかということについては、一般入試の願書の提出期限が2月の初めですので、現時点では何とも申し上げられません。

委員

例えばその4クラス編成で新設されたということは、どっかいうとみんなクラス数を減らしていこうという話をしているところで、両方合わせても4クラスで全然定員が足りなかったところを、どうして4クラスで新設されたのかという、そのあたりについてです。

事務局

まず統合する川本高校、邑智高校がそれぞれ2学級ということですが、確かにご指摘のとおり、18年度についてはかなり定員を割り込んでいます。これについては統合の影響もあろうと、我々は考えております。

統合校につきましては、普通科コース制・総合選択制導入ということで、魅力づくりということも考えました。そのような理由から4学級は必要だろうと判断をしたところです。また、統合新設校のスタートということから、その教員配置のことも考えた上で、4クラスで募集をしております。

委員

県教委の方は非常によくお分かりだと思いますが、今の説明を皆さんに御理解いただけたかどうか、つまり一昨年度の数字を見れば120を超えていると、つまり4学級分の数字があったわけですね。だから4学級で大丈夫だろうと。ところがいろんなことを発表した後に果たしてそんなに人が集まるんだろうかということになってきたのでしょうか、前年までのことがあるということは一つあると思います。

ところが問題は、例えば4学級で募集しても、120を割る数字しか集まらないということになると、普通ですと4学級で募集しても3学級分しか編成できませんでしょう。それを例えば総合選択制を取り入れたことによって、4学級分の編成が可能になるわけですか。そ

うという仕組みを恐らく皆さんお分かりではないと思います。例えば今年も120を割ったらどうなるんですか。例えば4学級分の編成が可能だとすると、少人数教育ということが言われておりますが、こういう方法をどんどん取り入れていけばいいのではないかとかいう論理にもつながっていくわけです。私もよく分かりませんので、事務局から説明していただきたい。

事務局

我々としては4学級分の生徒が集まってくることを期待しておりますが、結果として、3学級以内の生徒しか集まらなかったというときにどうかということでしたが、いわゆる総合選択制で4コースということでやっております。これについてはそのままで行く考えですし、教員配置につきましても、募集が4クラスであったときは、そのままの配置ということで考えております。

委員

今後、この会で、いわゆるどういうふうにするかというのは、私が今考えているのは、例えば先ほども上げたんですが、4、2、2の3つの学校があって、それをまとめるべきかどうなのかというようなことですが、結局、先ほどから出ている最低4学級ということは、それだけあれば、いわゆる教員定数等の関係で、子供の視点から見ると小規模校の難点は、うちの学校に物理の先生がいないとか、そういうことによって理系の大学に進めないんだというようなことが、自宅通学、地域との密着度を考えた場合に、いろんなメリットがありながらポイントはそこになってくるんですね。

ですから、子供の視点から見ると、学校規模は4クラスぐらいないと、教員の数もそろわないし大学の進学もままならないし、また部活動にしても、どうしても4クラスぐらいですと教員数が多ければ、うちの学校はサッカー部もあるしバレー部もあるし吹奏楽部もあるし、自分のしたいことができるんだということで、それぞれにメリット、デメリットはあるにせよ、やはり4クラスぐらいないと子供の希望は達成できませんよというのが、私は4だろうというふうに思うんですね。したがって、そういう視点から見ると、2、2で2校残すのと、それを4クラスの学校にまとめるのは、子供の視点からすれば絶対にまとめた方がいいということが結論づけられるわけです。

ところが、一方、そうすれば学校がなくなったところの地域は、間違いなく活気がなくなるということが出てくるわけですね。要するに究極はそのどっちをとるか。いろいろあるけど、やっぱり地域の活性化を目途にして、2、2の学校で残して、今のデメリットを補っていくようにするのか、地域の活気がなくなるのは止むを得ないが、やっぱり高校として子供が生かされるようにするのか、私はそのどちらにするか、この会としての究極の選択になっていくのではないかなというふうに思います。

議長

まことにそのとおりで、大変悩ましいところをどこかのレベルで考えなければなりません。それに当たって、少しこの委員会で意見を大いに闘わせて、仮に一つにまとまらなくても考え方を整理しておく必要があるということで、今、委員がおっしゃったのが一つの重要なポイントだと思います。

そういう点で自由に意見交換していただきたいと思います。

委員

魅力と活力のある県立高校づくりということですが、今の小・中学生、高校生にとって結

局、島根県に魅力がないんですね。自分が希望する仕事がないからみんな出ていってしまうのではないのでしょうか。ですから、なかなか子供に対して魅力と活力ということについて、立派なことは言えないのが現実なんです。

先ほどの発言のように、究極の選択だと。私は中山間地域に住んでいますが地域はもう崩壊しかけています。昼間はお年寄りだけで、恐らく5、6年先には小学校も統合してしまうのではないかと考えています。ですから、地域のことを優先して考えると、子供にとって本当に不幸だと思います。

委員

高等学校に何を求めるかということについては、委員の方々が地域が望む人材の育成ということを繰り返して言われました。私は違うのではないかと思います。人間的な成長、人格の形成とかということがしっかり学校でできていれば、では自分の住んでいるところをどうしていこうかというようにつながると思うんです。つまり、本当に自分が住んでいる町をどうしたらいいのかということを実地に考える力、実地能力のある子供たちというか、大人をつくっていくのが、その地域、高校とか学校だと思います。例えば、私は自分の子供に対して、地域に残って、地域のために尽くせとか、地域のためになる人間になれというふうには一回も言った覚えはありません。それでも子ども4人が4人とも、みんな帰ってきたいと言います。それは母親の魅力だったかもしれないし、先ほど言いましたように地域の高校で培った人間関係、友達だとか、仲間だとかということだったかもしれません。

私の住んでいるところも年寄りが多いですが、ただそこにはやはり地域が求める、福祉の情熱を持った子供たちが残ってくれるし来てくれるのではないかと考えています。もう少し未来を明るく考えていかないと、それこそ今、キーワードは地域再生だと思います。地域づくり、地域おこしといっぱい言われていますが、自分の住んでるところを自分たちでどうしていったらいいのかということを考えてられるように私はやっていきたいと思っています。それと先ほどの高校が4クラスないと適正規模じゃないから問題というのが、これは前回も言いましたが、4クラス以下なので、運営上の問題があるかといったら、そんなことはないですよという話をしました。けれど、先ほど発言があったように、では3校が3校とも1クラスになっても、それぞれが残っていくのかどうかというところは、これからすごく議論をしていかなければいけないと思います。

議長

私、地域政策ということで、去年の11月に全県の識者に集ってもらい、これからの島根の長期的なあり方について議論しましたが、戦略的な地域づくりのあり方、そのことは何となく高校や学校のあり方についてもヒントがあるような気がします。

ドイツやフランスですとシュリンクポリシー、つまり縮まりながらむしろその中に新しい魅力をつくって行って、活力を生み出していく、それによって実は、ほっておけば崩壊するのを、逆に崩壊しないで持続可能な村、町になっていくという議論がそのときも出ておりましたので、つながるかどうかわかりませんが、いろんな工夫をしていい地域をつくらうということは皆さん一致したお考えなわけですから、そのとき、一方の端に振って考えてみる、他方の端に振って考えてみる、その組み合わせの最もベストな方法について、あと数回いろんな検証を含めながら徐々に積み上げていけば、より望ましいところにつながっていくのではないかと期待しているところです。

それでは、次回以降の検討会議で、さらに議論を深めるということになりますが、その他

ということですが、事務局から何かありますか。

事務局

次回の日程ですが、現時点で3月14日水曜日の13時30分から16時ということで考えております。また御都合はお尋ねしたいと思っております。

議長

それでは、これで本日、私の議長としてのお務めは終わらせていただきます。御協力ありがとうございました。

閉会挨拶

三浦教育監

第4回の検討委員会を実施いたしましたところ、委員の皆様には大変お忙しいところ、また遠方、遠近を問わず御出席いただきまして、大変貴重な御意見を賜りましてありがとうございました。

今まである意味では導入で、いよいよ本格的な議論が始まったなという感じがいたします。さらに濃密な議論をお願いしたいと思いますけれども、きょう私が感じたところをちょっとお話しいたしますと、最後についてでございますけれども、子供の視点でこの問題を考える、あるいは地域の視点で考える、そのバランスのところの問題であるのではないかなと思っております。つまり適正な学校規模は何か、授業、地歴、公民であるとか理科の授業、すべての授業をきめ細かに展開できるし、部活、これはもう生徒にとって非常に大きな関心事です。いろんな部活が展開できる、そういう方面に視点を当てるのか、あるいは地域の活性化の方に視点を当てるのか。そればかりに視点を当てますと教育の機会均等であるとか、教育水準の維持向上というのが一体どうなっていくのか等々、今後議論を深めていただくとありがたいなと思えます。

いろいろな資料を出したらどうですかという御意見もありました。どうかこの時間だけでなく、資料の要望がございましたら、どうぞ率直に申し出てくださいとありがたいと思います。

本日は長時間にわたりましてありがとうございました。

閉 会